

国語 試験問題

二月十日実施

注 意

- 一、試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二、問題は余白をふくめ、十八ページにわたっています。
- 三、試験時間は五十分間です。
- 四、答えはすべて解答用紙の決められた欄に記入しなさい。

京華高等学校

受験番号
氏名

余白

問題は次のページから始まります。

余
白

一、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

吹奏楽に打ち込むも全日本コンクール出場を果たすことなく中学を卒業した茶園基^{ちやぞのもとじ}。憧れていた吹奏楽の強豪校である千間学院（通称千学）に進学したものの、幼馴染^{おきななじみ}の鳴神玲於奈^{なるかみれおな}が部長を務める今の吹奏楽部にはかつての栄光など見る影もなかった。しかし、そんな基の前に、黄金時代のOBである不破瑛太郎^{ふわえいたろう}が吹奏楽部のコーチとして現れ、一年生の基を部長に指名した。本文は、部長として始動した二日目にあたる場面である。

「今日から部長として、改めてよろしくお願ひします」

サックスパートの練習の前に、基は同じパートの先輩達にそう頭を下げた。サックスパートは基を入れて七人。一年生が二人で、あとの五人はみんな先輩だ。昨日の放課後に部長として挨拶はしたけれど、同じパートの先輩達には改めて伝えなかった。

基礎練習前の椅子の並びは半月状で、アルトサックス、テナーサックス、バリトンサックスと、形の違う楽器が基を取り囲んでいる。

「僕を部長にと決めたのは瑛太郎先生ですけど、引き受けたのは僕の意志です。先輩方はいろいろと思うところもあると思いますが……」

話の途中で、二年の池辺先輩が喉を鳴らした。あまりにあからさまだった。縁なしの眼鏡の向こうから、鋭利な視線が基へ飛んでくる。

A、三年の越谷先輩を見た。自分の楽器を膝にのせ、彼は真っ直ぐ基を見ていた。話を遮るだけ遮って目を伏せたままの池辺先輩や、不満げな様子そのまま顔を背けている他の二年生や、居心地悪そうに視線を泳がせている同級生とも、違う。「僕、『僕なんか部長になってすみません』とは言いませんから」

一人ひとりを見つめて、そう言い放った。強がっている。今、自分は爪先にB力を入れて、必死に背伸びをしている。でも、気丈に振る舞わないといけない。じゃないと、自分はどのようにして玲於奈を泣かせてまで部長になったんだ。

「格好いいこと言うなあ、茶園は」

越谷先輩の手がするりと楽器から離れた。「よしよし、わかったわかった」と、小さな拍手をする。木々の隙間から木漏れ日が落ちるような、穏やかな顔で。

「鳴神から昨夜LINEが来てさ。後輩が部長をやることを不満に思うのはわかるけど、三年が率先して部長の足を引っ張るようなことのないように、っってお達しが三年全員に回ってるんだよ。鳴神にそう言われちゃあ、嫌ですなんて誰も言えない」

昨夜、自分と話したあと、玲於奈は部屋に戻ってそんなことをしていたのか。

「俺もさあ、思うところがないわけじゃないんだけど、俺がパート内で茶園に冷たく当たったりすると、パート練がとんでもない空気になるだろ？ それは嫌だから、とりあえず俺は茶園をサポートしようかなと思います」

言いながら、越谷先輩は隣に座っていた池辺先輩の椅子の足を爪先でこん、と蹴る。池辺先輩は口をへの字にして、基を睨みつけてきた。

まさか、全員がいきなり受け入れてくれるとは思わない。もし自分が池辺先輩の立場だったら、同じことをしたかもしれない。

でもとりあえず、今は三年の越谷先輩が「応援する」と言ってくれるだけ、幸せだ。「一年が生意気なこと言ってるじゃねえ」と胸ぐらを掴まれるくらいの覚悟は、していたから。

「ありがとうございます。よろしく願います」

「あ、言っとくけど、サックスパートのリーダーは俺だからな？ そこ、忘れるなよ」

越谷先輩が自分の顔を指さしながら、周囲に念を押すように言う。池辺先輩が「誰も盗りません」と言っ、ほんの少し笑いが起こって、きりりと冷えていた教室が温かくなる。

「じゃあ、練習始めます」

遠くからトランペットの音が聞こえた。空を裂くように鋭い音は、間違いなく堂林だ。瑛太郎は彼を副部長に任命した。その音は、同じパートの部員をなぎ払うようだった。

午前の授業が終わると同時に弁当を掻き込んで、教室を飛び出した。やや遅れて、メロンパンの端っこを口に突っ込んだ堂林もついて来た。

「ついに俺達、先輩にアレをされるんじゃないか、焼きを入れられるってやつ」

も「もごとメロンパンを咀嚼しながら言う堂林を、「物騒なこと言わないで」と振り返る。

「ただの幹部会議じゃん」

「ここぞとばかりに、部長と副部長になった生意気な一年にガツンと言うつもりかも」

今日は昼休みに音楽準備室で吹奏楽部の幹部会議が開かれる。部長と副部長、学指揮、各パートリーダーが集まって、今後の練習の進め方や部内でトラブルが起きていないかを確認し、顧問からの指示を細かく共有するための集まりだ。

正直、怖い。自分が「駄目だ」と烙印を押した先輩達の中に飛び込んでいくのだから。

幹部会議の会場である音楽準備室の戸を開けると、中にはすでに玲於奈がいた。

「残念、二番と三番」

部長らしく一番に到着しようという魂胆は見えないで、玲於奈は基と堂林を順番に指さして笑った。五分もしないうちに他の部員もやって来て、狭い音楽準備室はぎゅうぎゅうになった。しかも自分と堂林以外は全員三年生。威圧感を覚えながら、基は今日の議題のメモに視線を落とした。とりあえず、一番無難な議題から入ることにする。

「まず、パート練のときに使う教室ですが、瑛太郎先生より戸締まりや片付けを徹底するようにということです。窓の鍵の閉め忘れがあったと、他の先生から報告があったらしいです」

言い終えると、一拍置いて玲於奈と堂林と越谷先輩が返事をした。さらにそれに遅れて、他のパートリーダーが続く。

「続いて月末のオーディションについて、各パートで情報は共有されてるかどうか、改めて確認してください。パートごとに演奏範囲が違うので、間違いのないように」

「練習しとく範囲は聞いてるけど、どういう形で審査するかって、まだ決まらないの」

低音パートの増田先輩が、テーブルに頬杖をついたまま聞いてくる。チューバを吹く、長身で肩幅もある男子生徒だ。

「決まってる、と思います」

「なんだよ、思いますって」

小声で増田先輩がそうこぼすのが、しっかりと聞こえた。玲於奈が小さく溜め息をついて、基の代わりに答えた。³

「まだ決まらないって言うか、瑛太郎先生の口振りだと、多分当日まで教えないと思う」

「せめて先生の前で一对一で吹くのか、全員の前で吹くのかくらい決めてもらわないと、こっちも気持ちの準備ってのがあ

るじゃん」

まだ不満そうな増田先輩のことを、堂林がわざとらしい笑顔で見た。

「別に、演奏することには変わりないんすから、どうでもいいんじゃないですか？」

嫌みが籠もった言い方に、基はテーブルの下でさり気なく彼の足を蹴った。

「……と、俺は思いますけどね」

顔を半分歪め、基を睨みながら堂林がそう付け足す。増田先輩がそれ以上に苦々しい顔で彼を見ているのに、気づいていないのか、あえて無視しているのか。

「ていうか、部長は本当に先生から聞いてないの？」

フルートのパートリーダー、岸原先輩がずっと基の方を見て言う。目が笑っていない。「こつそり教えてもらってるんじゃないの」という顔だった。

「……聞いてないですけど」

喉の奥から声を捻り出す。何故かそのまま「すみません」と謝りたくなった。

「部長も副部長も学指揮も聞いてないよ」

C、また玲於奈が答える。

「瑛太郎先生と一対一かもしれないし、全員の前で吹く形かもしれない」

玲於奈がそう言ってやっつと、岸原先輩も増田先輩も、他のパートリーダーの先輩達も納得してくれた。基は慌ててメモに視線を落とす。

4 「えーと、次なんですけど、学指揮の鳴神先輩から、朝練について提案が出ています」

「朝練への参加人数について」。玲於奈があらかじめ出してくれた議題がすでにメモに書いてある。それを読み上げる形で、玲於奈は話し出した。

「朝練は自主練ということになってますけど、コンクールに向けた練習も本格的になって来たし、もう少し積極的に参加してほしいなと思っています」

玲於奈の声はよく通る。話し終えたあとの室内の静けさが、ちよつと怖くなるくらい。

「俺達もさ、別にサボりたくて朝練来てないわけじゃないんだけど」

渋い顔でそう言ったのは、クラリネットの大谷先輩だった。

「部活のあとに塾行つて、帰って宿題片付けて、夜遅くに寝て。朝練まで強制参加ってなったら、過労死するよ、過労死」大谷先輩の「過労死」という言葉に頷く人も、何人かいた。大谷先輩の言う「俺達」とは、彼等を含めてのことなのだろう。

「それは私もわかってる。でも、千学は月曜や夜の七時以降が部活禁止で、ただでさえ他の学校に比べて練習時間が短いから、もつとそれを自覚してほしい。少しでも練習しようって思わないと、また埼玉県大会敗退だよ」

「はい、わかりました」
話を無理矢理終わらせるように、大谷先輩は少し声を張ってそう言った。

でも、話は穏便に終わってくれなかった。

「でもさあ、受験受験っていう人はどうして部に残ったのって話じゃない？ 自分の受験が大事なら、二年までで引退すればよかったのに」

そう言ったのはトランペットの櫻井先輩だった。「あの先輩、性格はきついけど、やる気はある」なんて堂林が言っていたわけ。

千学では部活は三年の最後の大会まで続けることができるが、大学受験に備えて、二年までで辞めてしまう人も少なからずいる。

「じゃあ何だよ、朝練出れないなら引退しろってことかよ」

案の定、大谷先輩が応戦する。櫻井先輩も引かない。

「誰もそんなこと言っていないじゃない。でも、三年が率先して練習しないと、一、二年にこの程度でいいのかって思われちゃうでしょって話」

越谷先輩が「お二人ともまあまあ！」と割って入り、櫻井先輩がテーブルに乗り出しかけた体をD引いた。大谷先輩が音を出さずに舌打ちをしたのが基の席からは見えた。

「部長、議長なんだから話をまとめてよ」

岸原先輩が基を見る。今度は、「どうせできないだろうけど」という顔をしていた。

「せ、先輩方は特に、受験勉強で僕達なんかよりずっと忙しいと思います。そんな中……」

「でもさ、受験を理由にコンクールを大事にしてる部員の足を引っ張っていいことにはならないと思うけど」
櫻井先輩の言葉の棘は取れない。基の話を遮って、また大谷先輩に喧嘩腰で突っかかる。

「じゃあコンクールのせいで受験に落ちてもいいのかよ。櫻井だって受験するんだろ」

「そもそもオーデイションの形式があ」と増田先輩が話を蒸し返し返そうになって、慌てて玲於奈が止めた。今にも堂林が「先輩達そんなだから一年に部長と副部長を取られるんですよー！」と言うんじゃないかと思ひ、あらかじめ彼の足を思い切り踏んだ。

この三年生達の上に、一体どうやって部長として立てというんだ。まだ堂林の方が好戦的な分、素質がありそうだと部長として全日本の舞台に立つ。そのイメージが、⁵一歩、二歩と遠のいていった。

(額賀濤『風に恋う』による)

1. A D にあてはまることばとして適当なものをそれぞれ選び、符号で答えなさい。

ア ぐっと イ さっと ウ ちらりと エ ぴしやりと

2. ——— 線部1に「引き受けたのは僕の意志です」とありますが、このときの基の心情として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 先輩達がいる中で部長を務めるのは無謀だと思ひながらも、「先生に指名されたからやるのではない」ということを強調している。

イ 先輩達がいる中で一年生にも関わらず部長に拔擢されたことへの不安を押し殺しつつ、「しっかりと務めよう」と決意している。

ウ 同じパートの先輩達なら、自らの意志で部長に立候補したことを正直に明かせば、自分のことを応援してくれるだろうと期待している。

エ 先輩達に任せていては部として今後の成長が見込めないということを示し、部長としての自分を認めてもらえるようにアピールしている。

3. ———線部2に「彼は真つ直ぐ基を見ていた」とありますが、このときの越谷の心情として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 部長になった基を生意気な後輩と思うものの、他の部員からの目を気にして感情を抑えようと思っている。
イ 自分と同じパートである基が部長になったことで、自分のパートリーダーの立場を奪われると思っている。

ウ 練習の雰囲気は何よりも大切であり、基が和を乱すようなことをしないように見張ろうと思っている。

エ 同じ三年生の玲於奈から連絡を受け、後輩でありながら部長になった基を支援しようと思っている。

4. ———線部3に「玲於奈が小さく溜め息をついて、基の代わりに答えた」とありますが、このときの玲於奈の心情として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 一向にまとまろうとしない部員たちの身勝手さにあきれつつも、せめて後輩たちの前でだけは仲の悪さを見せるべきではないと考え、取りつくるおうとしている。

イ オーディションの直前なのに審査方法さえも部員に教えない瑛太郎コーチにいきじお憤りを覚えつつも、なんとかこの場をしのぐようとしている。

ウ 新体制となって初めての幹部会議にも関わらず、自信のない様子でメモを読み上げるだけの基にいらだち、部長を交代したことを深く後悔している。

エ 顧問からの指示を共有する大切な幹部会議が、他の三年生により思うように進まない状況に気持ちが悪えつつも、基を援護して議論を進めようとしている。

5. ———線部4「朝練への参加人数について」という議題に対する部員たちの発言の内容としてあてはまらないものをつ選び、符号で答えなさい。

ア 「三年生がもっと率先して練習しなければいけない。そうしないと後輩達に示しがつかなくなってしまふ」

イ 「朝練は強制ではないがもっと積極的に参加してほしい。もっと練習しないとまた県大会で敗退になる」

ウ 「受験勉強が大変という理由で朝練に参加できないのであれば他の部員のために部活を引退すべきだ」

エ 「部活の後に夜遅くまで勉強して、その上朝練にまで参加することになったら身体を壊してしまふ」

6. ———線部5に「そのイメージが、一步、二歩と遠のいていった」とありますが、このときの基の心情を、「覚悟」ということばを用いて、五十字以内で答えなさい。

7. この文章の表現の特徴として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 基の視点から物語を描くことで、状況の変化と基の心情の変化を読者にわかりやすくしている。

イ 会話文の中に比喩表現を多用することで、部員達の青年期特有の揺れ動きやすい心情を表現している。

ウ 登場人物の表情や態度を細かく描くことで、先輩達の不満と部内で孤立する基の姿を読者に印象づけている。

エ 登場人物を多く登場させることで、基の存在感が薄れ、部長になることへの自信のなさを描いている。

8. 登場人物の説明として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 越谷は部長になれず残念に思ったものの、サックスパートのリーダーになれたことには満足している。

イ 堂林は基の唯一の味方であり、真面目に部活に取り組まない先輩達に対して持つ不満を隠そうとしない。

ウ 基は自分に自信がなく、本当は吹奏楽部の部長をやりたくないが、顧問の指名なので仕方がなくやっている。

エ 玲於奈は吹奏楽部がまとまることを願っており、一年生である基が部長を務めることを納得し支援している。

二、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ぼくたち人間は、進化の過程で言葉を得たことで、距離を保ってつなげられるようになるとともに、身体を使わず、時間と空間を超え、いろいろな人とつながることができるようになりました。

¹言葉はポータブルなものです。重さがないので、どこにでも持ち運びができる。言葉を使うことで、過去に起こったことを、まるで目の前で起こっているかのように解説することができるし、目の前で起きていることを、別の場所、もしくは今ではない時間に再現することもできます。自分が行ったことのない場所で起こったことを、あたかも行ったかのように再現して伝えることもできます。言葉を得た人間はフィクションを生み出しました。死を考えられるようになったのも言葉を得たためです。死者と対話できるという幻想も生まれました。フィールドワークの心得で書いたように、「緑の葉」や「赤い実」も、そう口にした段階でフィクションになります。

一方、言葉をもたない動物は、その場で瞬時に直観で対峙^{たいじ}し、解決します。それ以外のオプションをもちません。人間も本来、²同じ能力をもっていたはずですが、言葉の力が大きくなるにつれ、その力が減退しました。たとえば、その場はやり過^あぎして、あとで考えるといった状況では、言葉が力をもちます。あのとときあの人はいこう言ったけど、本当はどうだったのだろう、こんな情報を流しているけど、裏では何を考えているのか、ひよつとしたらとんでもないことを目論^{もくろ}んでいるのではないか、などと言葉にこだわってしまう。これは、言葉による幻想、フィクションに侵^かされていく証拠です。フィクションが前面に出てくれば、動物のように生の感情のぶつかり合いを通じて瞬時に何らかの解決策を見出^{みい}だす、という人間本来の能力が落ちていきます。

こうして今、人間の世界には、身体を通じたコミュニケーションをまったく無視した社会が出来上がっています。

人間は、言葉でルールをつくっています。たとえば、保育園では、「ねんねの時間ですよ」「一列に並びましょう」と言われて、子どもたちは眠くないけど眠らされ、並びたくはないけど並ぶ。小学校もそうです。「今日は朝礼があるから整列する」「教室に入ったら席につく」。こうした言葉による規則が先にあつて、自分がしたいことより、その規則を守ることが先決になります。会社のルールや法律など、すべて言葉によるルールです。

ゴリラの場合、何の挨拶もなしに2メートル以内近づいたら、身体が「えっ、何かおかしいぞ」と反応します。この「2メートル」という距離も、ぼくが感じたことを言葉に翻訳しただけで、実際の距離は状況によって異なります。でも、その

距離はその場にいればわかるし、ゴリラが何かを訴えてきていることもわかる。「何か興味があるものがぼくの周りにあるんだな」「ぼくと遊びたがっているんだな」「ぼくの隣に座りたがっているな」ということは、目を見ればわかります。何かいたずらをしようというときには、目がキラキラと光っています。ゴリラの行動や表情を受けて、ぼくは瞬間瞬間に理解し、どういう行動をとるかを判断します。こうしてぼくが身につけた彼らの「行動文法」は、「こういう行動をしたからこうだ」「こういう表情をしたからこう」などと言葉だけで表すことはできません。

かつては、人間も、身体感覚でさまざまな問題を解決してきました。お互いの関係や環境は毎日変わります。こうすれば今日はこうなるということ直観で判断して互いの関係を調整していました。

ぼくが子どもの頃もそうでした。自然は日々変わるものだから、ぼくらも変わらざるを得ません。雨が降れば、太陽が出れば、遊ぶ場所も方法も変わります。その度に、友だちと顔を見合わせて、気持ちがつながっていることを確認しながら、互いの関係を調整していました。それは、ゴリラの社会にとっても近いものです。こういう子ども時代があったからこそ、ぼくは、言葉では理解できないゴリラの群れに入ることができたのかもしれない。ゴリラの場合は、人間と表現の方法が近いから、余計わかりやすかったのです。

ところが、今の人間社会は、不変のルールに従うことが日常生活になっています。言葉が先行しているから、身体が感じていることより言葉を信じる。ルールが合わなくなったときにすぐに調整することができないために無理が生じます。

科学技術には良い面もあれば悪い面もあります。最初は良い面に注目が集まりますが、ある域を超えると今度はネガティブな面が強調されていきます。ダイナマイトを考えてもそうでしょう。最初は人間の力が及ばない物を壊すために非常に役立つのに、それがやがて社会を破壊する戦争の道具に使われるようになりました。言葉も同じです。

言葉は、人間が手にした技術の中で最初にして最大のものといってよいと思います。人間の認知能力は、言葉の発明によって一度つくり変えられました。これが、「認知革命」と呼ばれるものです。かつて言葉は人々の間のトラブルを調整するための交渉にも使われていたはずだし、集団間の暴力を鎮めるためにも使われていたでしょう。だから人間は集団を大きくすることができました。国家という巨大な組織をつくることができたのも、言葉によってバーチャルな世界をつくり、その物語を共有してみんながまとまれるようになったからです。ダイナマイトと同様、最初は言葉もよい作用をもたらしました。しかし、やがてその言葉が、暴力をつくり出すために使われるようになって、だんだん人間にとってネガティブな作用をします。

言葉を発達させるうちに、文字も生まれました。最初は、石や木に書いていた文字を、紙に書くようになり、やがてそれを印刷するようになる。さらに技術が進み、テレックスができ、ファクスが生まれ、そして今、ぼくたちはインターネットを通じて電子文字でつながるようになりました。

そもそも文字を介した理解には、常に疑いがつきまといま⁴す。会って話していれば、発せられた言葉だけの意味ではなく、相手の顔の表情や仕草、声色から裏の意味や背景を同時に感じることもできます。相手の言葉を聞きながら、「おそろく嘘を言っているな」とか「本気みたいだな」と思ったりするのは、人間は言葉を話しているとき、無意識のうちに感情を出すものであり、同時に相手の感情を読み取る能力をもっているからです。話し手は、相手の解釈が間違っていると感じたら訂正することができます。本来、言葉の役割が発揮される場所は、こうしたやり取りが可能な場面でした。

しかし、文字は読み手本位のコミュニケーションツールであって、対話ではありません。書いた人はその場にはいないので、読み手の勝手な解釈が許されます。読み手本位であるために、ときに誤解を生んで書き手が思ってもいなかった結論になったりします。再現する過程で誤解が生じるのは当たり前で、それを避けることはできないのです。

ラインなどのSNSがあたりかま⁵対話しているかのような使われ方をしていますが、それは、あくまでシンボルを使った文字世界の延長です。ラインを利用して人の中には、すぐに返事が来るから対話と同じような信頼関係をつくらせていると反論する人もいられるかもしれませんが、その論理には二重の意味で誤解があります。

一つは、言葉は抽象化されたものだということ。誰かと話をしていても、それは出来事すべてを表しているわけではなく、出来事をいったん言葉という抽象的なシンボルに集約してそれを再現しているだけのものです。実際には、言葉だけで相手の感情はわかりません。

もう一つは、文字化したり、肉声ではないものに変換してしまったりした場合、そこにさらに時間的な要素が加わるということです。言葉を話すということは本来、瞬間の作業でもあります。対話を書き言葉にすると、Aさん「…」、Bさん「…」というように、時系列に並べられることになりませんが、実際は、相手が話しているとき、相手の言葉を聴きながら、自分が次に話すことを考えている。それは書き言葉では表現できません。文字は、相手の言葉を受けて考えた結果出てくるものではあるけれど、その瞬間に自分の胸の中に生じた感情とは違うものです。書き文字の行間を読み取ることはできても、実際に言葉を肉声をもって交わし合っている状況とは違うのです。そこにも齟齬^{そご}が生じます。

ぼくたちは、誰かに会いに行くときには、服装や身だしなみを考えますね。相手によっては敬語も使う。そういうときの

A は、身体からほとばしり出るものです。ところが、スマホで言葉を文字でやり取りするだけなら、礼儀も敬語もそれほど気にしなくてもいい。だから相手によって変えることをしなくなります。相手が不特定多数であれば、ますます身構えがなくなっていくます。

さらに、顔も知らない相手から得た情報に対しては、勝手に想像ができる分、実際に会ったときに、文字の情報に裏切られるかもしれないし、それがコミュニケーションの足かせになるかもしれないし、それがときに犯罪に結びつくこともある。言葉はもともと B の役割を果たしていましたが、今は文字に引きずられて、行動を誘発している。会って「殺してやる」と言われたなら、「バカやる」と言い返せるし、取っ組み合って解消できることもある。殺すなどという行為はそうそう実現しません。でも、文字は、読み方次第でいくらでも想像が広がります。それが知らない相手であればなおさらでしょう。「殺される!」と恐怖で身がすくんでしまうかもしれません。

言葉を生み出し、文字を発明し、今、インターネットの世界を介して言葉をやり取りしているぼくたちは、こうした言葉の負の面にもあらためて目を向ける必要があるのではないのでしょうか。

(山極寿一『スマホを捨てたい子どもたち——野生に学ぶ「未知の時代」の生き方』による)

1.

A	B
---	---

にあてはまることばとして適当なものをそれぞれ選び、符号で答えなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| A | ア | 違和感 | イ | 疎外感 | ウ | 圧迫感 | エ | 緊張感 |
| B | ア | 冷却材 | イ | 研磨材 | ウ | 緩衝材 | エ | 断熱材 |

2. ———線部1に「言葉はポータブルなものです」とありますが、「言葉」が「ポータブルなもの」であることによつてもたらされたこととしてあてはまらないものを一つ選び、符号で答えなさい。

- ア 過去に起こった出来事を時間にとらわれずに自分の目で確認すること。
イ 実際に起きていないことをあたかも起きたかのように人に話をする事。
ウ 他の国に住む人と手紙を送り合うことでコミュニケーションをとること。
エ 死について考えるとともに、死者と対話することができると考えること。

3. ———線部2に「同じ能力」とありますが、どのような能力ですか。「く能力」につづくように二十九字で探し、初めと終わりの五字をそれぞれ抜き出しなさい。

4. ———線部3に「ゴリラの社会」とありますが、どのような社会ですか。「くがある社会」につづくように十五字で抜き出しなさい。

5. ———線部4に「文字を介した理解には、常に疑いがつきまといまふ」とありますが、その理由を「対話」との違いを明らかにしつつ、九十字以内で答えなさい。

6. ———線部5に「その論理には二重の意味で誤解があります」とありますが、筆者が「誤解」と考える理由として適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア SNSは自分の考えを一方的に相手や社会に対して公開するものに過ぎないから。

イ 文字では相手の言葉を受けた瞬間の自分の感情を正確に表現することができないから。

ウ ラインなどのSNSでは即時の返事を相手が望むため言葉をじっくりと考える時間がないから。

エ SNSやメールは信頼関係が築けていない相手とも文字でのやりとりができるから。

オ SNS内で使われる言葉では具体的状況のすべてを相手に伝えることはできないから。

7. 本文の内容としてあてはまるものには○、そうでないものには×をそれぞれつけなさい。

ア 昔よりも身体的能力が低下してしまったため、現代人は身体よりも言葉を信じるようになった。

イ スマホの普及によって、服装への気遣いや目上の人への礼儀を気にしない人が増えてきている。

ウ 言葉の便利さに慣れてしまうことは、人間が本来的に持つ能力を喪失させてしまうことにつながる。

エ ゴリラの仕草は一定の法則に基づいているため、訴えていることや次の行動を予測できる。

オ 言葉によって成り立つルールにみなが従おうとすることで、人間社会は維持されている。

8. 次にしめすのは四人の生徒が「コミュニケーション」について会話している場面です。生徒ア、エがしめした考えのうち、筆者の考えに最も近いものを選び、符号で答えなさい。

生徒ア 「僕は親からよくスマホばかり見ると言われます。理由を聞いたら、親はスマホばかり見ていると情報に振り回されて考える力を失ってしまうと言っていました。でも僕は友達とも連絡を取りたいし、便利なものはどんどん使いたいと思うな。」

生徒イ 「そうだよ。友達からのラインには早く返したいしね。ただ私は急いで返事をして後悔したことがあったよ。送ったあとに言い過ぎたかなとか自分の言いたかったことは伝わったかなと心配になった。次の日に学校で話をしたらやっぱり誤解されていたんだ。」

生徒ウ 「自分の思いがうまく伝わらないんじゃないかと不安になることはあるよね。この前も友達に伝言をお願いしたら全然違った内容で伝わってしまったことがあって、少し険悪になってしまった。他の人に頼るのではなくて自分で直接メールすればよかったと後悔したよ。」

生徒エ 「自分で直接伝えることは大切だよ。今の時代、ツイッターで自分の気持ちをつぶやいたり、インスタグラムで世界中に写真を公開したりできるから自分のことをみんな理解してくれると勘違いしてしまうけれど、本当に仲のいい人には、電話したり手紙を書いたりして直接的なつながりを大事にしていきたいな。」

三、次の①～⑤の——線部のカタカナを、漢字で書きなさい。

- ① 株のバイバイをする。
- ② チセツな文章。
- ③ 代金をセイキユウする。
- ④ 提案をコバむ。
- ⑤ 罪をツグナう。

四、次の①～⑤の——線部の漢字の読み方を、平仮名で書きなさい。

- ① 閑静な住宅街。
- ② 父は寡黙な人だ。
- ③ 政府を弾劾する。
- ④ 過去を顧みる。
- ⑤ 廃れた街並み。